

僕のセラピーアカデミア

メタス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本誌でシリアスなんでこちらはのほほんと。

く簡単なあらすじく

今作の出久は個性を持っています。

すごい原作崩壊&キャラ崩壊しています。

全体的にほのぼのとした雰囲気で行こうかな？と思っています。

目次

モフつとしまししょう	1
モフつとしませんか？	11
モフつとしたい	24
モフモフ準備	38
モフモフ準備つー！	59
モフモフにダイブ！	71
モフつと試験開店	80

モフっとしましよう

「きゅー」「きゅいー」「きゅっ！」

「キュキュ、キユイー！」

「いづくどの、いんこどの、おはようございますー！」

「ふわあ、おはよう…！」

「おはよ出久、ほら朝ごはん熱いうちに食べちゃいなさい」

僕の名前は緑谷出久^{みどりやいずく}。

母さんの緑谷引子^{みどりやいんこ}と一緒に暮らしてる、中学3年生。

将来の夢はヒーロー…だったんだけど、他の手段で人々を救いたいと思ってる。

個性と呼ばれる超能力的な力が、地球の総人口の8割に出現して数十年。

個性絡みの犯罪が増加していく中、それを取り締まる職業…ヒーローが出てきた。

人々の憧れの職業として年々注目の度合いは高まつてる。

かく言う僕も憧れてたんだけど、ふと思ったことがあったんだ。

“何で犯罪を犯してしまうのかな？”

僕なりに考えてみて、思い立ったのが…。

「癒しが足りないのかな？」ということだった。

個性は原則公共の場での使用が禁止になり、ストレス過多な時代になってしまった。例えば、翼があつて飛べる人間は飛ぶことを禁止されてる。

出来ることを制限されて、窮屈な生活を強いられるのは通常の人でもストレスが溜まってしまう。

敵になるにも必ず理由がある。

敵になるしか生きる道が無い人もいたはず。

まあ中には快樂殺人者や救いようの無い変態がいるし…。

全員に救いの手を差し伸べるのは難しい。

ならせめて、そちら側ヴェイラに行つてしまつて、手遅れになる前に救いたい。

あ、そうだ。僕の個性を紹介します。

その前に…。

お母さんが物を引き寄せる個性。

お父さんが火を吹く個性。

で、お母さんのお父さん…つまり僕からしたらおじいちゃんイちゃんの個性が動物に惹かれる個性。

たまに帰省するんだけど、近所の野良猫やら鳩やらがたくさん集つてた。

で、僕の個性が癒しの存在を引き寄せる個性。

具体的に言うと、人々のストレスを解消してくれる子を引き寄せる。

最初の方に喋ってた軍人っぽい口調が妖精さん。

海兵さんが着るようなセーラー服を着て、「〜であります」っていう口調が特徴。

他にも何人か常駐？してる子がいて、ローテーションで家事を手伝ってくれてる。

身長は15cm〜30cm位で、体重も2〜3kg。

「きゅー」「きゅいー」「きゅっー」って鳴いてた子がすすすす。

（・ω・）っていう顔をしてるモフモフした生物。

ウサギ位の大ききで、すすすくの由来は小さくてとても軽かったからすすすく育って

ほしいという願いを込めた。

姓名みたいな感じでそれぞれ名前がある。

名前は半ばフィーリングで付けました。

3匹はそれぞれ個性豊か。

最初に鳴いたのがすすすく咲夜。

メイドさんのカチューシャ？を付けた子。

手先が器用で、洋食を作るのが得意。

次に鳴いたのがすすすく妖夢。

黒いリボンを付けた子。

すすすす咲夜と同じくらい手先が器用で、和食を作るのが得意。最後に鳴いたのがすすすす白沢。

額から角が2本生えて、片方の角には赤いリボンを付けている。

比較的活発な子で、勉強してるとかまってほしいのか邪魔してくる。

可愛いからいつもモフモフしてる。

「キュキュ、キュイー〜」ってすすすす達より若干高い声で鳴いたのが、天狐。

白い毛の狐で、尻尾が2本生えていて先端に炎みたいな赤い模様がついてる。

全部の足に赤い靴下みたいな模様があって、白い体がそれらによって映えている。

頭には烏帽子みたいな飾りがちよこんと載っており、和風な雰囲気醸し出している。

最初に家に来てきたのが、妖精さん。

来た時は僕だけしか見えてなかったようで、お母さんには見えてなかったみたい。

僕が触ると他の人にも見えるようになるみたいで、お母さんはしばらく固まった。

原理は良くわからないけど、可愛いからいいかな。

でそこから崩しにすすすすや天狐がやってきた。

食費や色んなお金がかかってしまうので、バイトを始めた。

部活には入ってなかったし、体力や働くことの大変さが分かったから結果的にはプラスになった。

お母さんも天狐達と遊ぶことで、いい運動になつてゐるみたいで体重が落ちてきたらしい。

「じゃ、行つてきます！」

「はーい、気を付けてね。そうだ、牛乳と卵が切れかかってたから、買つて帰つて来てね！」

「はーい！」

「きゅー！」「きゅー！」「きゅっ！」

「いつてらっしやいであります！」

「キューー！」

天狐達に見送られつつ、学校までのんびりと歩いていく。

すると、八重歯が特徴的な薄い茶髪の女の子が走つてきた。

「あ、デク君！おはよう！」

「トガさん、おはよう」

彼女はトガヒミコさん。

公園ですくすく達と散歩していると、ベンチで俯いて座つてたから思わず声をかけた。

根気よく話を聞いてみると、個性の関係ですっと1人で悩んでみたい。

すすく達が膝や頭の上に登ってひたすら癒してた。

トガさんも恐る恐る手を伸ばして触れると、すすくが「きゅー！」って満面の笑みで鳴いた。

その時に幻聴かもしれないけど「ズキューン！」って聞こえた気がする。

でそこから「友達になって下さい！」って頼まれて、良く話すようになった。

血を飲むことで、その人そっくりの姿になれる個性。

それがトガさんの個性だった。

「一緒に改善策を考えていこう！どんな個性でも、トガさんはトガさんでしょ？」

「でも、こんな個性…敵向けじゃないですか…」

「ううん、敵向けなんかじゃないよ。僕もいるすすく達がいる。そんなに1人で抱え込まないですよ」

「つ…あ、ありがとう…！」

トガさんは感極まってぼろぼろと涙をこぼし始めた。

その後、トガさんは両親と話し合って僕のいる中学に転校してきた。

個性を誰にも言えなくて、半ば独りぼっちの状態だったらしい。

中学2年生の時だった。

全校集会で見たときはびっくりしちやっただけだね。

一緒のクラスになって、一緒に撮ったすくすく達の画像を見せ合ったら、それを見たクラスメイトが「なにその可愛い生き物?!」と詰め寄ってきたので、説明して動画を見せたらファンになった。

それ以来トガさんも元々の性格もあつて、クラスで中心にすることが多くなった。僕も皆と話すようになって社交性も上昇したと思う。

「…君。デク君!」

「わっ!ど、どうしたのトガさん?」

「もうすぐ学校ですよ?ぼーっとしてたので…」

「ホントだ…!ちよつと考え事してたんだ」

「もう、気を付けてくださいよ?」

その後もトガさんと話しつつ、教室に向かう。

「おはようございます!」

「おはよ〜」

「よっ、おはよう!」

「おはよう、朝から仲いいねえ!」

みんなから挨拶が返ってくるのを聞きつつ席に座る。

「ようデク」

「あ、おはようかつちゃん」

彼は爆豪勝己。通称かつちゃん。

かつちゃんもすくすく達の魅力に惚った1人。

最初はウザがつてたけど、次第にのめりこんでいった。

「そういえば、もう進路を決める時期だがデクはどうするんだ？」

「あ、それ私も気になります！どうするんですか？」

かつちゃんとトガさんが聞いてきた。

「雄英に行くよ？と言っても経営科だけどね」

「経営科？ヒーロー事務所の経営をするのか？」

「ううん、僕自身が経営するんだよ」

2人の頭の上に？マークが浮かんできたけど先生が入ってきたから放課後話することに。

く放課後く

「で、朝の話はどういうことだ？」

「どこから話せばいいかな…。えーっと、まずは僕の個性は知ってるでしょ？」

「癒しの存在を引き寄せる個性だっけか」

「そうそう。正直言うと、この個性で戦うって無理じゃん」

「うーんそうですね。私の個性もそんな感じですよし…」

「だからほら、一昔前に動物カフェって流行ったじゃん。あれと同じようなイメージの
お店を開きたいんだよ」

「このクラスのほぼ全員が常連になりそうだな…」

「二」絶対にいきます！むしろ行かせてください！「二」

クラス全員の気持ちや体育祭みたいになつた瞬間だった。

「あはは…それに個性に関して相談できないようなこともあるだろうし、そういう相談
所も兼ねれたらいいかなって」

「相談所か…。確かにデクになら色々な事を相談できそうだな。最近すくすくと同じよ
うな癒しのオーラ纏ってるし。それに、個性関係ならヒーローの事や俺らの個性の事
で、良くて確なことを教えてくれるし」

「何か照れるな…」

かっちゃんという言葉に照れると、周りのクラスメイトが一斉に頷いた。

「頑張れ緑谷！応援してるぜ！」

「頑張ってるね！あ、もちろん私たちも将来に向けて頑張るから！」

「うん！」

入試まで後10ヶ月。
気合入れて行こうか！

モフっとしませんか？

入試まであと1ヶ月。

模試の結果はA判定。

合格圏内だけど、油断大敵。

経営科の入試は、通常の入試と同じような仕組み。

筆記試験を受けて、面接を受ける。

先生によると多対一の面接で、雄英に来て将来設計を聞いてくるって。

「将来設計ですか…。やっぱりストレスフリーな社会に少しでもしたいから、そこを伝えたいと思います」

「確かあのすくすく？を用いた施設を作るんだったら、実際の写真や資料を用意してプレゼンのような形にしてみたら？」

「そうですね、それだったらクラスメイトに写真を撮ってもらおうかと…。なんか最近僕よりも皆の方が結構可愛い写真撮ってるんで」

「うん、皆の協力を得るのも良いことだ。お店を開いたらぜひ先生たちも招待してくれよ」

「アハハ…ぜひ来ててくださいね」

先生との面談を終えて、職員室を退出する。

教室に戻るとかつちゃん達が駄弁ってた。

「お、来た来た。デク、これからマツクに行くんだがどうする？」

「あー、行きたいんだけど最近またすくすく達が増えちゃって…」

「マジかよ…今何匹いるんだ？」

「えーつと…4匹かな？全員が少食だし、最近来てくれた子が野菜つて言うか植物を育てるのが得意だから、野菜のお金は浮いてるね。そうだ今日いくつか持っていくよ」

「おう、サンキュな。やっぱりすくすくも個性持ってたのか…」

「うん、僕たち人間の個性より劣るけどちゃんとそういうのはあるね」

そう、すくすく達にも個性はある。

最近デビューしたシンリンカムイやプロヒーロー達みたいに強力なものでは無く、ちよつとしたことにしか使えない。

中にはそこそこ強力な個性を持つてる子がいて、さつき挙げた野菜作るのが得意な子…すくすく幽香は3日で野菜なら実が出来て、花なら綺麗に咲き誇る。

流石に屋外でやってるとヒーローに注意されるから、家の中にプチトマト等の植木鉢で育てる事が出来るものを育ててる。

1度だけやってもらったのが、急速に成長させること。

出来たけど10秒位ですぐに枯れて、すすく幽香も疲れてた。その後は労いも兼ねて凄くモフモフした。

「んじゃそういう事だから、また明日〜」

「おう、じゃあな」

下駄箱で靴に履き替えて、自宅に帰る。

途中で商店街に寄って、学校に行く前に頼まれたお使いをすませる。

商店街の入り口のアーチを潜ると、近くにいた子供達が寄ってきた。

「あー！いずくだ〜！」

「ホントだ！きようはモフモフいないの？」

「こんにちは。今日はいないね〜。明日は休みだし、いっぱい公園ですくすく達と遊ぶから楽しみにしててね」

「「やったー！」」

そう、以前に買い物をしたときに、すすく達を連れて行った時があった。

やはり頭の上にモフモフしたものがあるのは珍しいから、商店街のおじさんやおばさんに近所の子供達が恐る恐る近寄ってきた。

で、子供達が好奇心ですくすくに触ると「きゅー！」と鳴いて、その場にいた全員の

心を驚掴みにした。

それ以来すすくはこの商店街のアイドル兼マスコットの存在で、皆から愛されている。

ちなみにSNSには上げてもらおうのはやめてもらってる。

商店街に迷惑が掛かつちやうからね。

目的の魚屋さんに到着。

「こんにちは〜」

「おう、いらつしやい！今日はあの毛玉はいねえのかい？」

「あはは、毛玉じゃ無いですよ。今日は何がオススメですか？」

「そうだな…お、運が良いな坊主！今が旬の鰯ぶりが残ってるな。ちよつと小さいが買ってくれたら、サービスするぜ？他の魚も付けてやるよ」

「本当ですか?!ありがとうございます！」

「おう、最近商店街に活気が戻ったのも、坊主があのですくすく?を連れてきてくれたからな！これからも鼻肩にしてくれよ？」

「はい、もちろんです！ありがとうございます！しました！」

運が良いことにサービスしてもらえた。

ふと視界に魚が入ってる冷蔵庫の上に、モフモフしたものが見えたような気がした。

…ん？あれつてもしかして…。

「よいしょ…。あ、やつぱり」

「ん？どうした…？っておお?!そんな所にいたのか？全く気付かなかったぞ…」

「最初は僕にしか見えないそうなんですよ。触ったら他の人に認識されるみたいです」

「はーそうなのか。何かそいつは猫みたいだな。だからここにいたのか」

「きゅー?」

魚屋さんに居たのは全体的に赤い毛並みのすくすく。

黒い帽子を載せていて、ピヨコンと黒い耳が帽子の横から生えている。

…猫じやらしてあつたかな？

この子も名前を付けてあげなきやね。

すくすくを頭の上に乗せて家にのんびりと帰って行く。

「ただいま。魚サービスしてもらったよ。あ、あと新しい子が来たよ」

「お帰り〜！あらサービスしてもらったの？何か最近運が良いわね。そこそこ懸賞が当たるようになったし。って新しい子が来たの？名前付けてあげなきや、ご飯食べ終わって会議しましょう」

「はーい、じゃあ散歩行ってくるね。あ、君はお母さんと一緒にいてね。うちの環境に慣れてもらわないと。出来るなら、お母さん手伝ってあげてね？」

「きゅいつー！」

すくすく（猫耳）の敬礼風の声を聞きつつ、散歩に行く準備をする。

「きゅー」「きゅいー」「きゅく」

「きゅつー！」

「キュツ！」

「りようかいですー！」

皆の声を聞きつつ、出発。

「あれ？デク君散歩ですか？」

「トガさん？奇遇だね、うんこれからすくすく達と散歩だよ。良かったら一緒に来る？」

「いいんですか?!ありがとうございます！」

少し進むとトガさんがいて、一緒に行くことに。

「最近、私の個性を何かに使えないかなと思って考えてるんですけど…中々思いつかないんですよね…」

「うーん、僕も血液に関して調べてみたんだけど、催吐性があるってさ」

「さいとせい？」

「少し飲むくらいならいいんだけど大量に飲んだら嘔吐しちゃうんだって」

「うえ…それは嫌ですね…。でも個性を生かすなら飲まなきゃですし…」

「きゅー…」

「むずかしいですね…。そもそもひとのたいえきをのむことじたい、ふつうならいやですよ」

「ましてやとがさんはおんなのこですし…。」

「いつそのこと、いずくどのがしゅうらいけいえいするしせつをてつだつては？」

「めいあんです！そうすればこせいはつかわずにせいかつできますね！」

「キュキュ、キュイー！」

「なるほど…じゃなくて！何か妖精さんが増えてる?!しかも何を言ってるの?!」

「そうか、妖精さんの言う事も一理ありますね…」

「トガさん？何をボソツと言ったの?!」

いつの間にか増えてた妖精さんの会話にツツコミを入れつつ、よく遊ぶ公園に。

すると小学校に上がる前位の女の子が、膝を押さえる様にして蹲っている。

その近くで、アタフタしてる男性がいた。

「いたい…」

「えーと、絆創膏は持っていないし救急車…じゃない、そうだ水道つてないじゃん！」

「どうやら、女の子が転んだらしく膝を擦りむいたっぽい。」

で、女の子の保護者？らしき人がジタバタしてる。

この公園には水道が無いから、擦りむいた後の処置が家に帰ってからじゃないとできないので、細菌が入ってしまう可能性がある。

「大丈夫ですか？」

「ん？ああ、ちょうど良かった！すまないがミネラルウォーターか何か持ってないか?!」
「え?!いや持ってないですね…」

「そうか、すまん急に言って悪かったな」

「いえいえ…つてどうしたの朱音^{あかね}？」

「キューー！」

突然足元にいた天狐の朱音が女の子の傍に近寄って行った。

「…?」

「キューキュー?キューー」

女の子を気遣ってるのか、鼻先を足の近くにもっていつて見上げている。

すると、何か力を込めるような動作を始めた。

「キュー…キューー！」

「えっ…?!」

一際大きな声を上げると、女の子の擦りむいた膝の辺りが淡い緑色の光に包み込まれた。

すると、擦りむいた場所が最初から怪我なんて無かったかのように綺麗さっぱり消えていた。

「ええ！朱音ちゃんって個性あつたんですか?！」

「すすすす達と同じように、一応あるんだけど……ちよつと特殊なんだよ」

天狐にも個性はある。タマフリって言うらしく、様々な効果を発揮する。

今回のように、怪我を治してくれるような治癒系の能力や、力が増す増強系の能力など効果はランダム。

「おお、綺麗に治ってる！すごいなお前！」

「わあ、ありがとう！」

「キューー！」

今回は朱音があの子を助きたい気持ちからか、治癒の能力が発動したようだ。

「すまないな、助かったよ。俺は治崎廻ちさきかい」

「私は壊理えり」

「あ、えつと緑谷出久です」

「キューー！」

「この子は天狐の朱音です」

「トガヒミコです！」

話を聞くと、壊理ちゃんは上司の人の孫娘で、世話をしてくれと頼まれたらしい。

「で、この公園に来て遊んでたら、壊理さんが怪我してしまったというわけだ」

「なるほど…ここは水道が無いので、この近くにもう一つの公園があるんでそっちの方がいいかもしれないですね」

「いやあ、俺もそうしたかったんだが…。なんでも同じ幼稚園の同級生から、この公園でモフモフした生き物に会えるって聞いたらしくて、どうしても行きたいって聞かなくってな…」

「ああー、それうちの子たちですね。良く休みの日に子供達と一緒に遊んであげてるんですよ」

「そうだったのか?!」

まさかすくすく達の噂が、子供達のネットワークで広がってたとは…。

ふと視線を向けると、ほわほわした空間が形成されていた。

「きゅー」「きゅー」「きゅーいー」

「キューー!」「ふわふわであります」

「フワフワ〜気持ちいい〜」

「そうだね〜溶けちゃいそう〜」

「なんだあの幸せな光景は…」

「癒しというのは世界を救えそうですね…」

視線の先にはすすくすすく達のモフモフを、全身で受け止めて堪能しているトガさんと壊理ちゃんがいた。

幸せそうな顔で完全にリラックスしている。

「壊理さん、もう帰りますよ。帰らないとオヤジさんに怒鳴られちゃう」

「む〜やだ」

「やだつて…」

「あはは…壊理ちゃん、今度遊ぼうよ。明日幼稚園の皆とここの公園で遊ぶ約束をしてるから」

「そうですね、それがいいです！そうだ爆豪君も誘いましょう！」

「そうだね、かつちゃんも誘ってみようか。何だかんだ言つて、面倒見がいいしね」

「良いのか？なんか大々的になつてるが…」

「大丈夫ですよ。すすくすすく達も遊んでもらえる人がいるのは嬉しいようですし」

「ありがとうな」

壊理ちゃんと遊ぶ約束をして、別れる。

「じゃあね〜！」

「じゃ、また明日頼むわ！」

「壊理ちゃんまたね〜!」

「はーい、またね!」

ちやうどいい時間なので、トガさんともここで別れることに。

「今日はありがとうございました!」

「ううん、壊理ちゃんも楽しそうだったし良かったよ」

「それじゃ!」

「うん、また明日!」

「そうだ、デク君!」

「何?」

別れの挨拶を済ませて、少し歩くとトガさんから声を掛けられた。

「妖精さんが言った事、私の夢にしましたから!よろしくお願いしますね!」

「えっ?!ちよちよトガさん?!」

最後に衝撃的な事を告げて帰って行くトガさんの背中を見つつ、しばらく呆然としてしまった。

「せきにんとらなきやですね!」

「おとこのかいしようにみせるときですよ!」

「ふぁいとです、いずくどの!」

「うゝ誰のせいだと思ってるの…」

「「さあ？」」

「君たちだよ!!」

入試が近づいてるけど、たまには息抜きが必要だね。
面接で使う資料の写真も、明日撮ってみようかな？

モフっとしたい

受験当日。

あ、壊理ちゃんや廻さんとはちゃんと遊んだよ。

今回の受験で使う良い写真が撮れたし、みんないい笑顔になってたし良かった。

「デク、大丈夫なのか？」

「うん、かっちゃんや皆のお陰で良い写真撮れたしね」

「それなら良かったです！」

雄英の正門の前に集合した僕たち。

かっちゃんやヒーロー科、トガさんは僕と同じ経営科を受けるらしい。

ヒーロー科は特別な会場で、経営科は雄英の教室で受験。

「じゃあ、また後で」

「おう、頑張れよ」

「頑張りましたよ！」

かっちゃんと別れて会場に入る。

教室に入ると既に何人が席についていた。

筆記用具を用意して、勉強したノートを見つつ集中を高めて行く。

少し時間が経過すると、担当の先生が入ってきた。

「はい、時間となりました。では今回の入試の説明をした後に、試験を開始していきます」

担当の先生の説明を受けて、試験が開始した。

〈試験後〉

「はい、終了です。筆記用具を机の上に置いてくださいね」

ふう、何とかなかったかな？いくつか分からない部分があったけど、許容範囲内だと思う。

「えーでは、昼休憩後に面接を行います。順番は受験番号順に2人ずつ行います。面接が終わりましたら帰っていただいて構いませんので、帰る際は忘れ物にご注意ください」

受験番号順…ってことは僕達が一番最後?!

トガさんと連番だったから良かった。

ふと隣を見ると、瞳に決意を宿したトガさんがいた。

それにかっちゃんんと約束した。ここで躓く訳にはいかない…!

そうこうしているうちに僕達の番が回ってきた。

「受験番号129番、緑谷出久です」

「受験番号130番、渡我被身子です」

「どうぞ」

「失礼します」

教室に入ると白いエズミ？のような人や、ブラドキングなど名だたるヒーロー達がそこにはいた。

1人の無精髭を生やした人は分からないけど…。

「じゃあ、自己紹介をお願いします」

「はい。市立折寺中学校から来ました、緑谷出久です」

「はい。市立折寺中学校から来ました、渡我被身子です。

「うん、それでは座ってください」

「失礼します」

椅子に腰掛けると、先生方が書類をパラパラと捲りつつ何か小声で話していた。

「例の…子達…ですか？」

「うん…そこだけ聞こうか…君？」

「その…合理的ですね…」

断片的にしか聴こえなかったけど、どんな内容かは分からなかった。

すると、白い先生が話始めた。

「では、始める前に自己紹介を。僕はこの学校の校長です。それでは緑谷出久君に渡我被身子さん。こちらから質問する内容は一つです」

「はい」

「まずは緑谷君に聞きます。履歴書に志望動機を書いてもらったんだけど、この『ストレスフリーな社会を作りたい』って具体的にはどうやって目指すつもりだい？」

「はい。その事なのですが私の個性が関係してくるので、こちらで作成した資料をお配りしてもよろしいでしょうか？」

「うん、良いよ」

「ありがとうございます」

先生方に皆で作り上げた資料を配る。

「この生物は？」

「まず私の個性は癒しの存在を引き寄せるといふものです」

「癒しの存在を引き寄せる……？」

「具体的な例なのですが……セラピー効果をもたらす生き物を引き寄せるといったものになります。」

お手元の資料を捲って頂くと小人がいると思います。私達は妖精さんと呼んでいま

すが、色んな物を作ったり直したりしてくれます」

「この子達は君が作り出した訳ではなく、君に引き寄せられて来たということかい？」

「はい、皆…とは言っても喋ることが出来るのが妖精さんだけなので、他の子がどうかは分かりませんが概ねそのような感覚だったそうです」

以前に妖精さん達にどこから来たのか聞いてみたけど、色んな場所（世界）？を旅してみたい。

で、気が付いたらこの世界にいたそうだ。

妖精さんがいた場所は海の上で女の子が戦ってたらしい。

天狐がいた場所は巨大な刀や鎖鎌を操ってモンスターと戦ってたって。

すすすすがいた場所は直接戦うことは禁じられていたから、その代わりに綺麗な弾幕？を使ってその美しさで競ってたようだ。

すすすすはそこにいた女の子達に似ているらしいけど、何で似ているのかは分からないって。

「うん、どのような個性かというのは分かった。ではどうしてこの夢を持ったんだい？」

「はい、私自身の考えなのですが…現在犯罪が発生する主な理由はストレス過多によるものだと考えました」

「そうだな…確かに敵の動機を聞いたらストレスが貯まったとか、そんな理由が多かつ

たな」

「それに個性に関する問題もあると思うんです」

そう言うのと先生方は頭上に？マークを浮かべた。

「私の友達にずっと個性の事で悩んでいた友達がいます。その子は親や友達にすらも相談できませんでした」

「…俺も同じような事で悩んでいたことがあったな。本気で何もかもが嫌になって、全てが敵に見えていた」

「あの…もしかして抹消ヒーロー・イレイザーヘッドさんですか？」

「?!良く分かったな」

「以前雑誌のコラムで読んだことがありまして…すごく心に残ってたんです」

「そうか…随分前に取材を受けたことがあったが、それを覚えてくれていたのか…ありがとう」

「いえいえ?!そんなとんでもないです!」

当時、ヒーロー雑誌を読んでいたら小さなコラムの欄があった。

ランキング上位のヒーローのプロフィールのみを重点的に見ていたから、細かいところまで見てなかった。

イレイザーヘッドが監修していたから、何となく読んでみたらすごく引き込まれる内

容だった。

その中の一文を紹介しよう。

『自分で言うのも変ですが、私の個性は敵向きな物です。その事でイジメの様な事も受けました。ですが、そんな俺を友達と呼んでくれる奴がいました。普通の個性の人からすると、何気ない一言かもしれないかもしれませんが当時の私はその一言で救われた。それ以来個性の事で悩んでいる人々の役に立ちたいと思い、ヒーローになりました』

「個性の事に限らず、様々な悩みを抱えている人はその大小関わらずに多くいるはずで
す。一人でも多く、その悩みについて一緒に考えつつ、解決をしていける社会を作りたい
と思います」

そう締め括ると、校長先生が相槌をうった。

「分かりました。では次に渡我被身子さん。志望動機は『個性による偏見や差別を無く
したい』との事ですが、これを目指したいと思つた理由は何ですか？」

「はい、これは私自身が体験した事です。履歴書にも記入しましたが、私の個性は擬血。
人の血液を飲む事で、その人そっくりになるといいう個性です」

「俺と同じような個性か…」

ブラドキングがそう言ったが、少し違う。

擬血は血液を飲む事で変身出来るが、ブラドキングの個性は操血。彼自身の血液を操

り敵を捕縛したり出来る個性だ。

「私はこの個性の事でずっと悩み続けてました。そんな中出会ったのがここにいるでk
…緑谷さんです。」

トガさんがそう言うと、先生方は瞠目して僕の方を見た。

「詳細は省かせていただきますが、当時の私は自分で何もかもを背負って、壊れる寸前で
した。そんな時緑谷さんと出会ったんです。個性を伝えても怖がったりせず、むしろ励
ましてくれました」

「…」

先生方は相槌をうちながら、トガさんの話に聞き入っている。

「当時の私はその言葉や行動が嬉しくて、その場で泣いてしまいました。その後は、緑谷
さんの助けもあり、友達が増えていき、以前とは比べものにならないくらい幸せな日
常を掴む事が出来ました。その経験もあり、私と同じような悩みを持っている人達を1
人でも多く救いたいと思いました」

「うん、よく分かりました。ではこれにて面接を終了します。退室してください」
「ありがとうございます」

椅子から立ちあがり礼をして退室する。

その後荷物を置いた教室に戻り、整理して正門に向かった。

「おう、お疲れさん」

「かつちゃんお疲れ!」

「お疲れ様です!」

一足先に試験を終えていたかつちゃんと合流した。

「試験ってどんな感じだった?こっちは筆記があつて面接があつただけど…」

「会場は違つたが、俺も同じだな。ただ、実技試験としてロボットをどれだけ壊したかがあつたなあ。最後にはビル位あるロボが出てきたから、足止めしつつ避難誘導してたわ」

「実技というか、ほとんど実戦に近いじゃないですか?!

すごいなあ…:ロボットを制作するだけでもかなりの経費が掛かったりするのにな、各会場に何体も用意するなんて。

そういうえば…:壊す?ヒーローの本質は助ける事だから、それ以外にもポイントありそうなのがするけど。

「まあ、やることはやったし後は結果を待つだけだね」

「ああ。そうだ、うちの母親が野菜のお礼つてことで、特製のピリ辛炒めを作つたらしいから後でデクとトガにもおすそ分けするわ」

「ありがとう!あれご飯が進むちようどいい辛さなんだよね」

「ええ〜？すごく辛いですよあれ！食べた後は汗だくになりますし…」
あ、そういうば：

「面接してくれた先生の内の一人がブラドキングだったんだけど、見間違いじゃなければ両肩にすくすくが乗ってたんだよね」

「そうなんですか?!すくすくつて出現した場所の特徴に関係する子が出てくるんですよ？確かブラドキングの個性つて操血でしたよね？」

「じゃあ、吸血鬼とか？すくすく達がいた場所つて、色々な種族がいたつて言つてたしありえそうじゃねえか？」

「ああ〜確かに」

でもこれ以上すくすくが増えちゃったら、費用がねえ…。

その辺も出来るなら相談してみようかな？

〜三人称視点〜

ここは雄英高校の会議室。

オールマイトを始めとした雄英で教鞭を振るっているヒーロー達が集まっていた。

「では、今回の入試での合格者を決めていきます」

イレイザーヘッドの主導で会議が進められていく。

プロジェクターに映し出されたのは爆豪の顔だった。

「敵ポイント並びに救助ポイント1位は爆豪勝己。個性は爆破。掌から爆発を生み出すことが出来るそうです」

「うん、文句なしの首席だね。様々な状況にぎこちないながらも対応していたし、何よりも安全を優先していた。彼は良いヒーローになれるね」

次に画面に出てきたのは、4人の生徒。

「彼らは？」

「この子たちは新しい可能性を秘めている」

面接を担当したヒーロー以外は頭上に？マークを浮かべていた。

イレイザーヘッドが続ける。

「今まで私たちは敵を倒し、人々を守り抜くことだけを考えていた」

「それがヒーローなんだから当たり前では…？」

そう言ったのはセメントス。

セメントスを操る事が出来る個性で、都市部での戦闘や救助で凄まじい力を発揮できる。

「いや、我々は犯罪が起こってからの対処は行っていた。だが、起こる前の対処はしていなかった。カウンセリングなどはあまり触れてこなかった」

「彼らならそれを補う事が出来るか？」

「ああ、俺達はその可能性を見た」

「そこでだ！新たな試みを今年から始めようと思う！」

根津校長が掲げた案について驚愕しつつも、議論は白熱していった…。

く視点が戻りますく

「そろそろごうかくつうちがくるころではないですか？」

「きゅー？」

「キユイ？」

「うん、受験から一週間弱経ってるしそろそろだと思うんだ「出久！雄英から荷物来てる！」けどってすごいタイミング！」

慌てて階段を駆け上がったきた母さんが持ってたのは、雄英高校の封筒が届いた。

「これって、ここのボタンを押せばいいのかな？」

ひし形の機械の頂点に押せるようなボタンがあったので押してみる。

『やあ！面接以来だね！校長の根津さ！』

「おお、凄い…！ホログラムで合格発表してくれるんだ！」

「はえー、さすがですね。ひーろーをいくせいするこうこうなだけあって、さいせんたんのぎじゅつがつかわれてますね」

「きゅー？」

「キユ?」

妖精さんはその技術に感心しつつ、すすすすくや天狐が不思議そうにホログラムに触れようとしている。

『さて、まず緑谷君。あることを告げなければならぬ。君には経営科を受験してもらったよね』

「何か不穏な感じが凄くするのは気のせい?」

「きぐうですね、わたしたちもです」

『結果は…経営科は不合格さ!』

「へえあ→!?!…経営科は?」

「なんかふくみをもたせたいいかたですね」

一瞬心臓が止まったかと思ったけど、その後の言葉で何とか持ち直した。

『実は前から計画されていたことがあったんだ。雄英に新しい科を作ろうというね。普通科やサポート科があるのに、市民を癒す科が無かったんだ。そんな時に君達が現れた!』

「新しい科?というか君達って?」

『名付けてセラピー科さ!急なことで申し訳ないが、セラピー科に編入してもらったことになった!さあ、おいで!君達を歓迎しよう!』

「きゅー！」

「キュー！」

「やったであります！」

「ちよ、皆一斉に来たら……！わあっ！」

「出久、どうだった……？……！フフツ、その様子じゃ合格したようね。お母さんも混ぜて

！」

その日、家には笑い声が響いた。

モフモフ準備

時間はあつという間に過ぎて、入学式当日。

僕達は受験の時にも来た雄英の校門に向かっていた。

「へえ、セラピー科か。ピッタリな場所じゃねえか」

「そうだね、最初に聞いた時はびっくりしたよ。それにしてもすごいねかつちゃん、首席合格って！」

「私も経営科は不合格って言われたときは、椅子から転げ落ちちゃいました」

他愛ない話をしつつ、クラス割の紙の前まで来て名前を確認する。

「俺は…ヒーロー科だな。前年度まで2クラス20人ずつだったと思うんだが…」

「セラピー科は1クラスしかないから組は無いんだね。ってヒーロー科も？」

「セラピー科は私たち含めて4人ですか…。ヒーロー科は40人つてことは合併したんですかね？」

まあ、派手な個性で活動するヒーローの方に目が行きがちで、裏方のサポートみたいな役割は敬遠されがちだから仕方ないかな？

逆に良く集まったと思うし。

〈雄英高校〉

「じゃ、また後でな」

「うん、それじゃ」

「お友達作って紹介してくださいね！」

「最初から作れると思ってるのか……？」

「かつちゃんと別れ、セラピー科の教室の前に到着。」

「扉大きいですねえ！」

「異形型の個性の人もいるし、バリアフリーかな？」

教室に入ると、既に全員そろってた。

「ん？ああ、緑谷と渡我ってあんたらか。俺は心操人志。よろしく」

『僕は口田甲司。よろしくね』

そう言っただけで挨拶してきたのは2人。

前者が紫色の髪をした心操君。

後者がゴツゴツした見た目で小声でジェスチャーを交えながら喋ってくれたのが口

田君。

後から聞いた話だと、恥ずかしがり屋らしい。個性を使う際ははっきりと喋るらしい。

「あつ、僕は緑谷出久。よろしくね」

「私は渡我被身子です！よろしくお願ひします！」

先生が来るまで時間があつたので、少し雑談することに。

「緑谷の個性は何なんだ？俺のは洗脳。使えば大抵の奴らは俺の命令に従う」

「僕のは癒しの存在を引き寄せる個性だよ」

「私は擬血ですね。血を飲むことでその人そっくりになれます」

『僕のは生き物ボイス。動物に色々なことを命令できるんだ』

全員の個性が聞き終わつたんだけど、心操君が僕の個性が気になるみたい。

「緑谷の個性ってどんなのなんだ？」

「えーつとねえ…？ちよつとごめんね」

気になることがあつたので、心操君の両肩に手を伸ばす。

「なんだ『きゅー？』うおッ！びっくりした！」

『…！』

やつぱり。見間違いじゃなかった。そこにいたのは2匹のすくすく。

片方は全体的にピンク色をしていて、顔の左下辺りに瞳のような濃いピンク色の丸い球体があつて、そこからコード？のような物が伸びている。

もう片方は、雰囲気は似てるけど抹茶色の子。丸い球体は同じだけど、瞳は閉じてて

黒い帽子をかぶってる。

名前はまた考えるところと、姉妹？のかな良く似てるし。

「ほー、これが癒しの存在って奴？っていうかさつき俺の両肩に居なかったか?!」

『モフモフしてて、可愛い（*、ω、*）』

「普段は僕以外には見えないんだけど、触ったら実体化して他の人も触れたりする事が出来るんだ」

「わあ、また新しい子達ですね！帽子や、このコード？がハートの形になってて可愛いですー！」

「少しくすぐくと戯れてると、イレイザーヘッド（※ここからは相澤先生で表記します）先生が来た。」

「はい、このクラスの担当になった相澤だ。早速だが入学式がある。体育館に集合してくれ」

「「はー」」

相澤先生が担任なんだ。

「かっちゃんこのクラスは誰が担当するんだろ？」

「体育館に移動中」

体育館に行き席を探していると、ヒーロー科の隣にセラピー科の椅子があった。

あれ？ヒーロー科って2クラス無かったっけ…？

『それでは只今より入学式を始めます。まず最初に根津校長先生よりご挨拶とお知らせがあります』

「やあ！校長の根津さー！」

そう言つて壇上のマイクがある机の上に、乗つたのは面接の時にお世話になつた根津先生だった。

「今年もこんなにも多くのヒーローの卵を迎えられて、嬉しいよ。僕らは君達が次世代のヒーローになれるように全力でサポートする！さて、挨拶はこれくらいにしよう。今年からある科が新設された。そう、セラピー科さー！」

聞いた事もない単語が出てきて困惑し、ざわめきだす。

「セラピー科は主に市民などの心のケアを目的としたもの。今までヒーロー活動のみを重点的に見てきたけど、今年から心のケアも重視していこうと思う！」

「その関係で、ヒーロー科は今年から合併し、1クラスのみになった！その分様々なサポートを学校から行うから、安心してほしい！」

↳教室に移動中

そんなこんなで入学式が終了し、教室に戻る。

「しかし、何するんだろうな？」

『あれじゃない？カウンセリングみたいなの』

「若しくはすすく達と戯れるカフェみたいなのを経営できるのか？」

「でも、そういう店舗って雄英が用意してくれるの？カウンセリングの方がまだ現実味があるというか…」

あーだこーだ話していると相澤先生がやってきた。

「はい、皆も気になつてると思うがセラピー科としての主な活動を発表する。カウンセリングを目的とした土日限定のカフェを経営してもらおう…！」

『「何か色々混ざったけどやった〜！」』

予想していたことが混ざってしまったけど、将来の夢に一步近づくことが出来る…！
思わず皆で叫んでしまったけど、相澤先生に睨まれてしまった。

「それと、緑谷。すすく達の食費やら何やらの件だが、カフェを寮代わりにしてもらおうかという案が出ている。ところすすく達は配膳とかが出来るのか？」

「そうですね。配膳もできますし、簡単な料理なら作れる子もいますよ。
妖精さんに頼めばこんな感じで料理を持って行つてくれます」

携帯に保存していた動画を先生や皆に見せる。

そこに映っていた妖精さんを見て、三者三様の反応を示した。

「おおおう…：そうか。セラピーの一環として、ランチクツクの食堂でちよつとした配膳と

か、ふれあいをしてもらいたいと思ってるんだが、人見知りする子はいるのか？」

「いえ、基本的には人懐っこい子ばかりなのでその辺は大丈夫です」

すすすす達はなぜか分からないが抜け毛というものは無い。

生き物なら冬毛とか夏毛とかがあるのだが一年中を通してモフモフなままだ。

なので、安心してキッチンに立ってもらえるし配膳も任せられる。

「分かった。校長に伝えておこう。出来ればすすすすたちの世話も兼ねて口田・心操・渡我にも寮で生活してもらいたいんだが……」

「『大丈夫です！むしろさせてください！』」

「お、おうそうか」

若干食い気味で皆が同意すると、例のカフェの建物を見させてもらえることに。

「おぉー。オシャレですね」

「ああ。教員全員で案を出しつつ建設した。ログハウス風だったり和風だったりとか色々な案があったがそれぞれの良いところを取ったものになった」

店の外観は洋風で所々に様々な建築方式が取り入れられており、喧嘩する事無くまとまっている。

上部に付いている看板にはまだ何も書かれてないが、両サイドにすすすすや妖精さんに天狐がデフォルメされて書かれていた。

中に入るとテーブル席・お座敷席・カウンター席と、ありとあらゆる座席が用意されていた。

お座敷は靴を脱いで上がる畳方式で、掘り炬燵になっている。

テーブルとカウンターは木製。

店内にいてだけで不思議と落ち着く雰囲気になっている。

「はー、お金かかってますねえ」

「まあな、昨今のヒーロー社会でもセラピー活動が重視されていてな。その先駆けとしてお前ら4人がうちに来たから、こちらとしても全面的に協力することになった」

『それにしても大分気合入ってないですか?』

「ああ…何かうちの連中もストレス溜まってらしくてなあ。かくいう俺もそうだが…。緑谷が見せてくれたあの写真を見せてくれた時から、『全身全霊をもってサポートしよう!我々の、いや人々のために!』をモットーにこのプロジェクトが進められたんだ。最初の内の一か月は、我々教師やお前たち生徒に対しての営業になる」

「欲望が隠しきれないですけど…まあ完成したらぜひ癒されてください」

あ、かつちゃんに後から聞いたんだけど、ヒーロー科の担任はブラドキングで副担任はセメントスらしい。

3日後から入寮(この場合は入店か?)するので家に帰って母さんに事情を説明する。

「そうね…正直言うと、結構生活費もギリギリだったのよね。それにすすくすくちゃん達のカフェに興味あるし、いいわよ」

「ありがとう、母さん！」

「きゅー！」

「キュツ！」

「よろしくであります！」

明日は休み。色々と準備しなければいけないので、早めに寝ることに。

自分の部屋に行くと、HERO—LINEヒーローラインに連絡が。

※HERO—LINEとはセラアカ時空でのSNSで、通称はヒロイン。

何だろうと思って開くと、セラピー科のグループに連絡が。

渡心わたしんギル。パイア我さん：明日、休みなので皆で買い物に行きませんか？

ハートロール操君：良いぞ。丁度買いたい物あったし。

アーマウス口田君：僕もく

グリーンティ緑谷：同じくだよ

ギル。パイア：じゃあ、10時にショッピングモールに集合しましょう！

ハートロール：おう

アーマウス：はい

グリーティー：りよーかい

ちようど、洗顔料とか買ったかつたし良かった。

すすすくたちのシャンプーやらも詰め替え用の奴を買っておかないと。

～次の日～

一足早く着いたため、ベンチに座つてのんびりと。

ここのショッピングモールでは何度か買い物をしており、その際にすすすく達も一緒に買い物できるように許可はもらつてます。

今日一緒にいるすすすくは、先日心操君から発見された2匹。

名前はすすすくと、すすすくこいし。

前者はピンク色の子。後者は緑色の子。姉妹なのかな？

いつも一緒にいる。たまに姿を見失うことがあるけど、頭の上か肩の上に良くいる。妖精さんに聞いたところ、さとりの方は心を大体読むことが出来る。

こいしの方は無意識に入り込む能力らしく、発動すると見つけることが難しくなる。僕の場合は個性の関係か、位置がなんとなく分かるけどね。

そうこうしていると、皆が集まったので行動することに。

(服装などはご想像にお任せします。作者がオシヤレに疎いので…)

「緑谷は何を買いに来たんだけ？」

「すすくすすく達のシャンプルーとかかなあ。基本的には1種類なんだけど買ひ物に付き合つてくれた子が気に入つたものにしてるよ」

ちなみに今はすすく幽香が選んだフローラルな香り。

お陰で、全員お風呂から上がったら部屋の中が一気にお花畑に…。

「そういう心操君達は？」

「俺はアイマスクかな。最近寝つきが悪くて蒸気で温めるやつを試そうかと」

「私は化粧品類ですね。寮になるので、少し買ひ足しておかないと」

『僕は飼つてるウサギの牧草とかおやつかな？新しいものが出てくるかもしれないし』

それぞれ買ひたい物を決めた所で、行動開始。

～移動中～

最初は僕とトガさん、心操君の用事を済ませることに。

「蒸気で疲れを取るアイマスクでラベンダーの香り付き。良いかもな」

「アイマスクも良いけど、ハーブティーで体をリラククスさせるとか、色々な方法があるし試してみれば？」

セラピー関係の事を調べる内に、色々な知識が身に付いた。

心地よい睡眠の方法や世界各国の料理、マッサージなどリラクゼーションに関してはかなりの知識量になった。

「なるほどな。その辺は考えた事なかったなあ…これもセラピー科としての勉強になるか」

「あはは、そうだね。人間は生きている内に必ず悩みやストレスを抱え込んだりうからね。だからこそそれを解決してあげるのも大切な事だからね」

「きゅー！」

「きゅ…きゅきゅー！」

「ん？どうしたの？」

心操君と話していると、足元でシャンプーを選んでたすすく達が言い争い（可愛い）をしていた。

どうやら香りの好みが別れたらしく、ポップポップと短い足で互いの頬を突いていた。

「よしよし、ケンカしないの。両方買ってあげるから」

「流石だな。仲裁もお手の物か？」

「まあね、すすく達の仲裁から子供達の仲裁もやってたし。大切なのは同じ目線になって話を聞いてあげることだね」

『なるほど…僕も何度か子供のケンカを止めに行ったことがあるけど、尽く怖がられたんだよね。今思ったら少し上から喋ってたなあ』

流石に大人、しかも個性を使った喧嘩とかは止めたことはないけどね。

そうこうしていると、トガさんの買い物も終わったみたいだ。

ということでは次は口田君のウサギの餌とかを買おうと移動。

その途中、楽器店があつたので寄ってみることに。

「生演奏の喫茶店とかオシャレじゃないですか？」

「確かに。でも俺は弾けないぞ？」

『そこは音楽の先生とか、他の科の人にレクチャーしてもらえばいいんじゃない？』

すると、店員さんが首を傾げつつ音が鳴っている電子ピアノを見ていた。

「どうしましたか？」

「ああ、このピアノ、自動演奏機能はついてないのに何故か演奏されてるんですね。故

障した訳でも無いのですが……」

「へえ……？」

良く見てみると、ピアノの椅子の背もたれと座面の上、鍵盤の上に見慣れたモフモフした物が。

「よいしょ。君達は楽器の演奏が得意なのかな？」

「えっ?!何ですかこの生き物!」

困惑している店員さんに事情を説明。

「はあ、何となく分かりました。どうりで犯人が誰か分からなかった訳です。でも、この

子達が音楽を弾いてくれたお陰で売上が伸びたので、win-winですね」

「あはは……。ほら、勝手に弾いてごめんなさいってしようか」

「「きゅー……」」

店員さんに対して、お辞儀すると快く許してくれた。

「君達の名前も付けてあげなきゃね」

「良く似てますし、この子達も姉妹何ですかね？」

「しかし、音楽の話題が出てた時に丁度出てくるとはな」

『この子達にも手伝ってもらえれば生演奏も出来そうだし、楽器は後で先生とかに相談だね』

その後は計5匹に増えたすすく達と、ペットショップに向かい口田君の用事を済ませて、昼食にすることに。

人間組の注文を済ませて、すすく達の昼食（ドーナツ等）をいくつか買って、談笑しながら食べてると後ろから声を掛けられた。

「ん？デクにトガじゃねえか。買物か？ってまた増えたのか？」

「あ、かつちゃん。そうだね、交流も兼ねて買物だよ。こっちのトリオの子達はさつきそこの楽器屋さんで見つけた。こっちのデュオの子達はここにいる心操君の両肩にいたよ」

「ああ、あんたが緑谷達が言っていた幼馴染か。俺は心操。セラピー科だ」
『僕は甲田口司。よろしくね』

良く聞いた声が聞こえたので振り向くと、かつちゃんがいた。

その背後にはヒーロー科かな？の何人かの男女がいたので、僕たちと同じように買い物に来たんだろう。

「俺らも時間が空いてる奴らで来たんだ。そうしたら頭と肩に見慣れたモフモフしたものが乗ってる姿があつたからな」

「わあ……ふわふわやあ！あつごめん！自己紹介が遅れてしもうた。私は麗日お茶子。よろしくー！」

「ウチは耳郎響香。楽器屋で見つけたって言ってたけど、この子達音楽出来るの？」

「俺は尾白猿夫。この子達、人懐っこいな。君の個性なのか？」

指先に肉球のような物がついてる茶髪の子が麗日さん。

耳たぶからコードのような物が伸びているのが耳郎さん。

尻尾があるのが尾白君。

「そうだね、僕の個性だよ。音楽は……そうだ。妖精さんいるかな？」

「ふわあ……よびましたか？」

「つてどこに乗ってるん?!」

妖精さんと呼んだら、ちようどかつちゃんの頭の上にいた。

「いごこちがよかったです」

「妙に重かったのはお前がいたからか？このよろ」

「むう、ほつペをムニムニしにやいでくださいやい」

かつちゃんが妖精さんと戯れているのは中々無い光景だ。

「妖精さん、この子達の個性を聞いてみてくれる？」

「わかりました」

かつちゃんの頭から飛び降りると、すすく達となにやら話し始めた。

すすくたちと妖精さんが

「そういえばセラピー科は何をするんだ？」

「んく…：そういえば喋って良いんでしょうか？」

「良いと思うよ何も言われなかったし。まだ詳しいことは決めてないけど、カフェをするんだって」

「カフェ？」

「そうそう。色々な悩みを相談できる場所だったり、ただのんびり過ごす場所だったりね」

「何でも最初は学校の関係者を対象に、試しに開店してみて大丈夫そうなら一般市民や

ヒーローに対して開店する予定らしいよ」

「あく絶対にそれは流行るね。これを見ればねえ」

尾白君が苦笑しその光景を見ると、そこにはすすく達と戯れているトガさん達が。

「じゃあ、ヒーちゃんは緑谷君達と同じ中学校だったんだ」

「そうですよー。元々地元は違ってたんですけど、色々な状況が重なってデク君に助けてもらったような感じですね」

「へえ、緑谷なら何となく分かるけど爆豪にも？あんまり想像がつかないけど」

モフモフされ、完璧にリラックスしているすすく達。

麗日さんや耳朗さんの表情がかなり緩んでいるので、セラピー効果はかなりありそう
だ。

麗日さんは個性の無重力ゼログラビティを使用して、すすく達を浮かせて空中遊泳をしている。

耳朗さんは個性のイヤホンジャックを猫じやらしのように器用に動かしつつ、戯れて
いる。

尾白君も戸惑いながらも、いつの間にか着いてきていた朱音と戯れている。

「まあ、もう少ししたら正式に発表があると思うから楽しみにしててよ」

「ああ、良心的な価格設定で頼むぞ?」

「あはは、流石にその辺はきちんと考えるよ」

そんなことを話しつつ、食べ終わったので移動することに。

のんびりと歩きつつ、ヒーロー科での事やセラピー科の事について会話を楽しんでると…。

「廻兄さん、あの人デクさん？」

「お、本当です…「ああ、前に話していた壊理の怪我を治してくれた坊主か」ねって親父さん…」

横から聞いたことのある声が掛かったので、振り向くと可愛らしい格好に身を包んだ壊理ちゃん。

春っぽいコーデでビシツと決めた治崎さん。

それに、袴を着こなしている初老の男性が立っていた。

「こんにちは治崎さん、壊理ちゃん。そちらの方は…？」

「おう、こんにちは。前に言っていたお嬢さんの母親の父親。つまりはお嬢さんの祖父に当たる人だ」

「孫の壊理が世話になったようだ。壊理の祖父の穿通せんつうじんぎ仁義だ」

そういつて頭を下げたので、慌てて止める。

「いえいえ、顔を上げてください。僕はあの場でできることをやっただけですから」

「ありがとうな。壊理も君達と遊んでからかなり明るくなってな…」

そう言うとは何故か治崎さんに目配せをする。

「お嬢さん、向こうでリングゴのスイーツが一杯売ってますから、行きましようか。そのの皆さんもどう？ おごるけど」

「うん、行く…！ おじいちゃんは？」

「ああ、後で行くよ。ちよつとお兄ちゃん達とお話ししてからな」

「はーい！」

というこで、僕とトガさんと仁義さんが残った。

「すまんが残ってもらって。後で何か飲み物でも奢る」

「いえいえ、とんでもないです」

「それで話つてのは何ですか？」

そうかつちゃんが言うと、仁義さんは少し悲しそうに目を伏せて語り始めた。

「壊理の個性の話だ」

「壊理ちゃんの個性…？ そういえば聞いたことが無いような」

「当然だろう。壊理は個性に対して強いトラウマを持っている」

仁義さんの言葉は僕たちに強い衝撃を与えるには充分な威力を持っていた。

「…初めて発動したときに、何かしらの出来事があったということですか？」

「ああ、壊理の個性は『巻き戻す』」

「巻き戻す？ 時間をですか？」

「正確に言えば、生物の時間を戻すということだ」

「つ！もしかして、生物に対して発動したら…」

僕がそこに行き着いた時、仁義さんは神妙な顔で頷いた。

「…そこに存在した事実が残り、それそのものは消え去ってしまう。壊理から両親の話が出なかつただろう？」

「そういえば、出てくる話は治崎さんや穿通さんや鉄砲玉の人達が主でした」

「実際にその瞬間を見たわけでは無いが、初めて発動した際は制御不能に陥ってしまったらしい。幸い近くに個性を無効化する個性のヒーロー…イレイザー？ だったかがいたから、大事には至らなかつたが。それが約1年前の事だ」

ここで相澤先生の名前が出た事には驚いた。

知り合い同士も繋がつたとは。

「壊理は個性に対する深いトラウマを。両親は壊理に対するトラウマを抱えてしまい、今は別々に暮らしているんだ」

「もしかして、両親のどちらかは…仁義さんの子供ということですか？」

「ああ、娘だ。今は個性に驚いたとは言え壊理に対して恐怖を覚えてしまったという罪悪感と、未だに残っている当時の光景の鮮烈さとの狭間で戦っている。最近になってよ

うやくテレビ電話越しに話せるようになってな。だが、個性の制御の起点になっている壊理の角が伸びてきてな。どうするかという事で色々話し合っているんだが、いい案が思い浮かばなくてな」

「でしたら、担任の先生に相談してみましようか？」

「先生に？」

「はい、壊理ちゃんの個性を消してくれたヒーローが僕たちの担任なので、相談すれば何かしらのサポートは出来ると思います」

「おお、ぜひ頼む！」

とりあえずその場は解散する事になり治崎さんの連絡先を教えてもらい、逐一報告するようになった。

余談だが、鉄砲玉のクロノさんから聞いた話だと、壊理ちゃんや僕らのお菓子まで買った治崎さんの財布はすっからかんになってしばらく真っ白に燃え尽きてたらしい。

喫茶店出来て一般客に解放されたら、サービスしますね…。

モフモフ準備つー！

買い物から数日後。

僕とトガちゃんは放課後に相澤先生に休日の壊理の事で相談をしてみることに。

寮（店）に荷物を運び入れて、授業を受けた後職員室に向かう。

「今日のセラピー基礎学（仮）は店の名前やその他諸々の事について話し合ってもらおう」
「『はー！』」

「とりあえず店の名前と提供するメニュー、それにすすく・妖精さん・朱音達をどうやってお客さんと触れ合ってもらうかを決めよう。4人では決まらないだろうし、俺と後もう1人呼んであるから計6人で決めて行こう。入って来てくれ」

「おお。ショータがちゃんと教師してる！ちよつと感動している俺がいるわ…」

そう言っ入ってきたのは相澤先生と同じようなゴーグルをした白っぽい髪の男性だった。

「白雲しらくもおぼろ臙だ。二元幻影ヒーロー楼閣つて言った方がいいかな？」

「聞いたことあります！確かイレイザーヘッドやプレゼントマイクと同期で、様々な幻を操って敵を捕獲していたヒーロー！確か怪我が原因で引退したと聞いていましたが

…

「おう、その通り！良く知ってんなあ！ちよいとやらかしてしまつてな。日常生活や個性の使用には問題ないんだが、医者からヒーロー活動は無理だといわれてな、丁度根津校長からセラピー科の教師として働かないかと誘われて、来たつてわけだ！」

「ま、そういうことだ。時間は有限。合理的に行こうか」

「ははは！相変わらずで安心したわ！」

白雲先生の自己紹介が終わり、まずは店名を決めることになった。

「じゃあお店の名前を考えて行こうと思うのですが、何かいい案はありますか？」

「はーい！【喫茶もふもふ】はどうですか?!」

「ストレートなネーミングだねえ。でも何かもう一捻り欲しくない？」

可愛らしい名前の案を出してくれたのはトガ。

続いて挙手したのは…

『はい。【ふれあい喫茶】アニメ』

「うーむ、確かに触れ合うことが出来て、覚えやすい店名だ。中々いいんじゃないか？」
「シヨータが褒めるとはなあ…。明日は槍でも降るんじゃないや「降るわけねえだろ…」そりやそうか」

口田君だった。どこの世界線ではヒーロー名になってそうな名前だけど、可愛らし

い名前だ。

続いては…。

「喫茶く癒快く」こんなものしか思い浮かばなかったんですけど…」

「おお。落ち着いた雰囲気出てるねえ」

「快く癒されるか。中々洒落た名前じゃないか」

オシャレな名前を考えてくれた心操君。

生徒で最後を締めくくるのは…。

「最後は僕ですね。【喫茶く幻柔庵く】です」

「なるほど、幻獣と掛けてるのか。確かに妖精や天狐は幻の動物だし、合ってるな」

「のんびりと出来そうな雰囲気が出るな。心操が出してくれた案も良いが、こちらも

いいな」

案が出揃ったので、店名を決めることに。

「うーん、残念だけどトガちゃんとか口田君のは無しかなあ。2つとも良いけど、ただの動

物カフェみたいに思えちゃうね」

「だな。それで行くと心操か緑谷の物になるな。…俺としては緑谷の案が良いと思う

が」

「理由は？」

白雲先生にスパツと案を切られた2人は若干凹んでいるが、すぐに立て直し、相澤先生の意見を聞きたいらしい。

「…なんとなくだが、これから先すすくすすく達が増えたりしそうでな。そうすると賑やかになってくるだろう？心操の案だと臚も言つてた落ち着いた雰囲気からかけ離れていきそうでなあ」

『「ああ〜」』

「俺は実際に見てないけど、結構賑やかなの？」

「ええ…ん？ちよつと失礼しますね」

「どうしたん「きゅい〜」だうっ?!」

臚の股座の所にこれまたすすくすすくが。

狸っぽい見た目で、鼻の所にメガネがあるすすくすすく。

「ああ〜びつくりしたわ。「プツ…ククク…！」っておいショータ！笑ってんじやねえよ！」

「ハハハ！いやあすまんすまんっハハハ！」

「Msジョーク並みに笑ってんじやねえかよ…」

相澤先生が大爆笑している中、白雲先生がすすくすすくと戯れる。

「ああ〜これは癖になるなあ」

「きゅ〜」

早速すすくすくの虜になっていた。

「基本的にヒーロー活動つてストレスとの戦いになってくる所あるからなあ。期待の新人ヒーローとかTOP10入りしている奴らの苦悩は計り知れねえし…」

「実際に目の前で救えなかつた命や、敵や自然災害によつて引き起こされた惨劇を目の当たりにして立ち直れないようなトラウマを抱えてしまった奴を何人も見てきたな」

「…あの、そういつたトラウマを抱えて引退したヒーローつてどんな職業に就いてるんですか？」

「ん？ああ、ヒーローハローワークつていうのがあつてだな。そこで職業をある程度は斡旋してもらってるぞ」

『意外と福利厚生つてしっかりしてるんですね』

ヒーローの裏事情をちよつと知つて店の名前は「喫茶く幻柔庵く」に決まつた所でメニューの話に。

「とりあえずはドリンクメニューを決めて行くか」

「ですね。定番のオレンジジュース・コーヒー・炭酸飲料・紅茶・烏龍茶とかですかね。後は季節限定の飲み物を何個か提案するとしましよう。提供方法はドリンクバーかわドリンク制かどちらが良いでしょうか？」

「ワンドリンクで良いと思うよ？ドリンクバーの機械って高いし、すすすす達がイタズラしないとも限らないしね」

相澤がドリンクメニューについて話始めた。

心操が提案し、緑谷が案を少し修正した。

「あとは…最近女子の間で流行り始めているタピオカとかスムージーはどうですか？」
『映えるっていう奴だっけ？すすすすたちと一緒に撮れば可愛いから評判も上がりそうだね』

「うんうん、良さそうだな。和風な抹茶ラテとかもいいかもしれないね。そうだ、来店してくれた生徒にアンケート取ってみたら？」

「そうだな、その方が合理的だ。ドリンクはそのくらいで良いだろう。次はフードメニューだ」

意外とすんなりドリンクメニューが決まった所で続いてフードメニューへ。

「喫茶店のメニューだからサンドイッチやフレンチトーストとかの軽食で良いと思います。後は定番のデザートやその季節限定のスイーツを幾つか出すような形ですかね？」

「中には和食が良いと言う奴も出てきたらどうする？」

『簡単なおにぎりと味噌汁、漬物と主菜のセットを提供すればどうですか？味噌汁やスープは大量に作って、他の料理にも使えそうです』

「だな。野菜スープを作っておけば、カレーのルーとかを入れてやれば簡単に作れるかな」

そういう話していつて粗方メニューが決まった。

細かいことは営業を開始しながら改善していこうという話になった。

(相澤や隴も経営についてはド素人のため)

様々なことを話し合つて、あつという間に放課後になった。

「失礼します。相澤先生はいらっしゃいますか？」

「ああ、ここだ。どうした？」

「折り入つてご相談したいことがあります……」

この時相澤は寮のことで聞きに来たのかと思つたが、次に緑谷から言われた言葉は予想の斜め上をPLUS ULTRAしていた。

「雄英つて子供預かれます？」

「何言つてんだお前？」

その場にいた先生が全員首を傾げていた。

その後気になる話をしていたということで、校長先生も交えて話すことに。

「相澤先生がヒーロー活動をしていた際に、小学生進学前位の額に角が生えた女の子を助けませんでした？」

「んー…？ああ、あの子か。個性が暴走して苦しんでいたからよく覚えていたな」

「どんな個性なの？」

「巻き戻すという個性らしいですよ」

トガちゃんが個性について話すと先生方が「何で知ってんの？」という顔をしていたので、簡潔に説明することに。

「つまり…その子は指定敵団体の死穢八斎會の現組長の娘さんの子供？」

「しかも、その事件があつてその…壊理ちゃんとその両親がトラウマを抱えてお互いによろやくビデオ通話で話せるようになった…」

「でも、最近壊理ちゃんの個性の起点の角が伸びてきたから、いつ発動してしまうか分からないと。言い方は厳しいけど、いつ爆発するかも分からない時限爆弾を抱えているよなもののね…」

上から13号先生・ブラドキング先生・ミッドナイト先生。

「その巻き戻す個性というものはどのような物なんだい？」

「はい、生物をの時間を巻き戻すというものらしいです」

「なるほどな、両親にもその子にもトラウマになつてしまう訳だ」

「ええ…せめてON/OFFのコントロールが出来れば大丈夫なんですけど、どうやらその個性のエネルギーが溜まってくるとその角が伸びてくるらしいです」

「今はまだ少ししか出てないので安心できるのですが、どんなきつかけでまた暴走してしまうのか分からないので、雄英で預かることはできませんか？」

「そうだねえ。本来だったら難しいんだけど、セラピー科の授業の一環ということにしようか。」

それに、色んな人達と触れ合うって言うのもいい経験になるからね」

「ありがとうございます！」

詳しい話は本人たちと交えてしようかということでもとまった。

ひと息つこうと出された飲み物を緑谷とトガが含んだ瞬間、相澤が神妙な顔をして切り出した。

「あ、一応心操と口田には言っておけよ。いきなり寮に女の子を連れてきたら、お前らが誘拐したか若しくはお前らの子供かと思われるぞ」

相澤が放った一言はオールマイトのスマッシュよりも破壊力があつた。

思わず口内の飲み物をほぼ同時に嘔き出す。

「ゲホゲホッ……いきなり何言ってるんですかっというかさらつとトガさんがいる前で何セクハラ紛いな事言ってるんですかそもそも僕とトガちゃんみたいな美人で可愛い人とか釣り合うわけないしうにゃあ……！」

「デク君との子供……というか今美人で世界一可愛いって……うふふふふふ」

「あーあ。イレイザーよ、やってしまったな」

「何をだよ。つていうか緑谷は世界一なんて言つてないだろう」

「それは言わないお約束よ。あの年頃の子達は想像力豊かんだから。ほら見てみなさいよトガちゃん顔。完全に緑谷君とのデート↓プロポーズ↓結婚までこの喋ってる間に想像したわ」

「そんなにかい?!最近の少女たちは凄いな」

「オールマイト君爺臭いよ?」

最後に一波乱あったが、良い結果で終わった。

余談だが、赤面&トリップしてしまった2人は5分ほどした後先生達の生暖かい視線にさらされながらその場を後にした。

以下は帰り道の会話。

「ううっ…相澤先生め…ごめんね、トガさん」

「うふふ…へ?何で謝るんですか?」

「え?だってトガさんには僕みたいなのは似合わないでしょうみゆ?!」

語尾が変になってしまったのは、緑谷が言い終わる前にトガが頬を手で挟んだからだ。

「むう、デク君は自己評価が低すぎます!私にとってデク君は王子様ヒーローなんですから、すご

く格好いいしカアイイの！このフワフワした癖っ毛も、パツチリした目もそばかすも全部含めて格好いいんです！」

「分かった分かったから！こんな場所で恥ずかしい事いわないでえ！」

お互いの顔しか見えてないが、今2人がいる場所は住宅街。

しかも帰宅時間ということもあり、人の往来はそこそこ。

そんな中で大声で叫んでいたら、そりゃあ目線は集まるわけで…。

「おつ、ひみちゃんに出久じゃねえか！夫婦喧嘩か？」

「若いつていいわねえ！」

「でくにーちゃん、ひーねえちゃんをたいせつにしなよー！」

「だああああ！違う違う！そんなんじゃないです！」

「ええっ！デク君私との関係は遊びだつて言うんですか?!」

「そんな愛憎たつぷりな昼ドラマみたいないなセリフとジェスチャーしないでえ！余計に混乱してるからあ！」

とまあこんな感じでカオスな空間が出来上がった。

この件以来、緑谷はトガの事を意識する（元からしていたが）ように。

トガはこの件（カオスな町内事件）を知ったトガの両親からは「あんなに良い子は今どきいないから、捕まえなさいよ？」と。

緑谷の母親（引子）から、「ひみちゃんなら出久を任せてもいいわよ？あの子は女子に免疫無だから苦戦するかもしれないけど、ひみちゃんは出久と一緒にいた期間が長いし、あの子の好き嫌いをある程度知ってるでしょ？ほとんど公認みたいなものだし、ガンガン行っちゃいなさい！」

既に外堀が埋められている状態である。

渡我被身子が緑谷被身子になる日も近いか…？

モフモフにダイブ！

今日は壊理が寮に来る日。

あらかじめ口田と心操には緑谷が伝えてある。流石に驚かれたが、事情を話すと快諾してくれた。

「今の女の子って何が好きなんだろう？」

「プリ〇ユアとかですかねえ。私はよく見えました」

「可愛いもの好きなんなら、すすすす達もいるし良いと思うけどな」

『一緒に過ごすし、ゆっくり聞いていこうよ。のんびりと行っても問題ないと思うよ』
と言うわけで、ゆっくりと好き嫌いを聞いていくことにした。

すると、相澤がやって来た。

「お前ら、八齋會の若頭が来たぞ。後、その部下も」

「廻さんが？」

「廻さんだか誰だか知らんが、マスク付けてたぞ」

潔癖症の治崎らしい。

「一応指定敵団体ってことで、プロヒーローである俺達が立ち会うことになった。少々

物々しい雰囲気になってしまいが我慢してくれ

「分かりました」

先生の案内で治崎とその部下、壊理が待つてゐる場所まで行く。

「お、来たか。お嬢さん、来ましたよ。」

「デク兄、ひー姉！お久しぶりです！」

「わつとと…うん久しぶり、壊理ちゃん！」

「久しぶりだねえ！あ、その服可愛いね！仁義さんに買ってもらったの？」

執事のような格好をした治崎。

可愛らしい春の陽気が感じられるような格好に身を包んだ姿は、物語に出てくるプリンセスのよう。

駆け寄つて飛び込んできた壊理を緑谷が優しく受け止め、1回転。抱つこの形に落ちて、地面にゆっくり降ろす。

「うん。服はミミックさんと乱波さんを選んでもらったの」

「え？本当？」

意外な人物の名前が出てきた。

常にキレてる入中常衣ミミックと、ケンカしまくっている乱波の2人がこんなにかわいらしい服を選べるのか？という疑問が頭を埋め尽くした。

「ああ。ミミックはあれでも妻帯者で、ちょうどお嬢さんと同じ位の子供がいるんだよ。んで乱波の方は妹がいるらしく、良く世話をしているってさ」

「へえー。人は見掛けによらないんですね」

意外な人物の意外な情報を聞いた所で、本題に入る。

「では改めて。死穢八齋會の若頭、治崎廻だ」

「若頭補佐を務めている玄野針くろのはりです。この度はお嬢さんのために尽力して頂きありがとうございます」

「緑谷や渡我の担任をしている相澤です。」

「校長の根津さ！ヒーローとして困っている子を放っておけないからね。当然の事さ」

大人の挨拶が終わり、少し碎けた雰囲気になった。

「廻、あの事を」

「おっと、そうだった」

玄野がそう言うと、急に相澤に向けて頭を下げた。

「急に何を…?」

「1年前にお嬢さんを助けて頂き、ありがとうございます。死穢八齋會一同を代表してお礼申し上げます」

「あー…。よして下さい。ヒーローの役割を果たしていただけですから」

感謝を述べる死穢八齋會と、述べられるヒーロー。

相澤にしては珍しく焦っている。

「緑谷、相澤先生なんで焦ってんだ？」

「アングラ系ヒーローだから、直接感謝を言われる事はあんまりないんじゃないのかな」
珍しい相澤の姿を見たところで、察に入って話す事に。

「みんなー、お客さん来たから手伝って〜」

「きゅー!」「キュイ〜!」「いえっさー!」

号令を掛けると、様々な場所からモフモフ軍団がやってくる。

「実際に見るのは初めてだけど、圧巻だねえ」

「…」スッ

視界の端でカメラを構えた治崎さんを横目に、お茶とお菓子を用意していく。

すすすす達がお菓子、妖精さんは紅茶、天狐はクッションを持ってくる。

「しかし、この子達は賢いんだねえ」

「ええ、料理の手伝いもしてくれますし寮の外に作った畑の手入れもしてくれますよ」
皆に行き渡った所でお茶会開始。

「そうだ、ブラドキング先生。ちよつと失礼しますね」

「ん?」「きゅいつ!」「ぬお!」

そこにいたのは小さな蝙蝠の翼を携えた2人のすくすく。

可愛らしい帽子に、お姫様のようなふわふわしたロリータファッションのような格好に身を包んでいる。

姉妹だろうか、良く似ている。

妖精さんと呼んで名前とかを聞いてもらおう。

「全く気付かなかったな。緑谷にしか見えず、触れると他人にも見えたりするのか」

「ですね。見えない代わりに物に干渉できるみたいなので傍から見たらポルターガイストみたいになるんですよ。この子達もデパートの楽器屋にいて、ピアノを3人で弾いてました」

そう言つて頭の上と両肩に乗っているすくすくたちを見せる。

妖精さんに聞いてもらつて判明した名前。

買い物に行った時にいたプリズムリバー三姉妹。

頭の上の金髪の子がすくすくメルナサ。

右肩の薄水色の子がすくすくメルラン。

左肩の薄い茶色の子がすくすくりリカ。

能力は手や足を触れずに楽器を弾けるといふものらしく、楽器店で弾いていたのもその能力。

(原作のそれぞれの能力は無いものとしますby作者)

「いづくさん、かのじよたちのなまえわかりましたよ。うすいむらさきいろのこが、れみりあ・すかーれつと。きんぱつのこが、ふらんどーる・すかーれつとというそうです」「スカーレット姉妹ってことか。ブラドキング先生の肩にいたのは何か理由があるの？」

「なんでもきゆうけつきのけつとう(血統)らしいですよ。といつてもそのち(血)はかなりうすくなつていて、とまとをせつしゆすればいらしいですよ。ぶらどきんぐについていたのは、ほのかなちのにおいがしてちよつとおちつくらしいです」

「吸血鬼！へえこの子達がねえ。蝙蝠の翼で確かにそれっぽい」

玄野さんがボソツと呟いた。

「つていうか吸血鬼つてトマト食うんだな。血液っぽいけどそれでいいのか」

新たなすくすくが加わり賑やかになった。

時間が経つのはあつという間で、死穢八斎會の2人は帰ることに。

「今日はありがとうございました。お嬢さんの事をよろしく願います」

「いえいえ、我々ヒーローを頼っていただきありがとうございます」

「それじゃあ、お嬢さん。また会いましょう」

「うん、廻兄さん。針兄さん、またね」

そう言うに乗ってきた車に乗り込み、寮を後にした。

「壊理ちゃん、寮を改めて案内するね」

「うん！」

「一緒に行きましょう！」

すると自然と壊理が渡我の左手と緑谷の右手をつなぎ、寮へ入っていく。

『何か親子みたいじゃない？』

「ああ、確かに。新居に入っていく新婚みたいだ」

そんな話をされてるとは露知らず、設備を紹介する。

粗方説明し終わったところで、リビングに集合し飲み物を飲みつつ緑谷が相澤に質問する。

本人の強い希望でその間壊理は緑谷の膝の上にいることに。

壊理はご満悦のようで、ほわほわという効果音が聞こえてくるような雰囲気を出しつつ飲み物を飲んでいた。

「そういえば相澤先生、平日は壊理ちゃんはどうするんですか？」

壊理にお菓子を取ってあげつつ、緑谷が相澤に質問する。

「まあ小学校進学前だし簡単なお勉強とかをしてもらう予定だ。体を動かす体育の時は、すすすくたちにも手伝ってもらおう。すすすく達との鬼ごっこなら、壊理ちゃんの速

度に合うだろう」

教師らしく受け答えしつつ、しっかりと子供用のドリル等を確認している相澤。

「すすくすくたちの運動にちようどいいですね」

『カフェって今週の土日から、ヒーロー科を対象に行うんですよね?』

「ああ、最初はテストの役割も兼ねて身内で行う。んで、ヒーロー科・普通科・サポート科・経営科に俺達教師でテストを行う。まあ、大丈夫だろうがな」

心操が感想を言つて、口田が相澤に質問すると想定していたのかすらすと答える。

「壊理ちゃんはその間どうするんです?」

「それが問題なんだよなあ。俺達教師もいつも見れるわけではないからな。いつそのこと、カフェを少し手伝ってもらおうか?」

「それが良いかも知れませんがね。でも接客とかは俺達がやりますよ。少し盛り付けをやってもらつて、すすくすく達の面倒を見てもらいますか?」

何の話?と疑問符を浮かべこちらを振り向いて壊理を撫でつつ、「壊理ちゃんのお勉強の話とか、今度僕達がするお店のことを話してるんだよ」と伝えれば、「お店するのは私も手伝いたい!」と笑顔を満開にして元氣よく返事をしてくれた。

その場にいた全員がその笑顔の破壊力に悶えつつも話を進めて行く。

「それじゃあ口田と心操でレジ接客、緑谷と渡我で調理をしてもらつて、すすくすく達に

もちよくちよく手伝ってもらおう感じでいいか？」

「そうですね。そうしまししょうか。衣装はどうするんですか？」

「とりあえず雄英の制服の上にエプロンでも付けるか。しばらくはそのままやってみらって、デザインがまとまったら仕立ててもらおうかな」

そんなこんなで話を進めていき、開店当日に。

モフっと試験開店

いよいよ幻柔庵の開店日がやって来た。

緑谷は緊張もあつて皆よりも早めに起きてしまったため、眠気覚ましも兼ねて幻柔庵に行き色々作業を行っていた。

食材の仕込みや店内の掃除などを済ませたので、寮に戻り全員分の朝ごはん(和食)を作った。

メニューはご飯・味噌汁・大根の漬物・焼き鮭・ホウレン草のおひたし。好みによつて、納豆や海苔等も完備してある。

そういうしていると、階段を降りる音が聞こえてきた。

「何かいい匂いが……つてデクくん?！」

「あ、おはよう。ご飯出来てるから、顔洗つて来てね」

最初に降りてきたのはトガと壊理。壊理に至つては半分夢の中のようだ。

「あー、わりいな作つてもらつて。つて言うか何時に起きたんだ?」

「寝てるときに足音が聞こえた気はするけど……」

次に来たのは心操と口田。口田は接客を行つていくため、会話の音量を上げる事を目

標に特訓し、成功。

普通の会話も出来るように。

「4時位かな?ふと目が覚めてもう少し寝ようと思っただけど寝れなくて。ついでに色々作業してたんだ。さ、冷めないうちに食べて?」

「いただきまーすの声が食卓に響き渡り、それぞれ思い思いに食事を始める。

「うん、美味しい。味噌汁も出汁の旨味が出るね、これって煮干し?」

「そうだよ、いつもだと味噌汁だけでも時間があつたし」

ズズツと味噌汁を飲みながら、味の感想を言う口田。

「漬物もいい味出してるな。これってすすくすすく幽香が作つた野菜か?」

「そうそう。お陰で野菜の消費が少なくて済んでるんだ」

パリポリと良い音を立てながら漬物をつまむ心操。

ちょうどいい塩加減で漬かっていたためご飯が進む。

「壊理ちゃん、おいしい?」

「うん!」

「うふふ、かあいいですねえ」

「なあ口田。口の中が甘つたるいんだが」

「奇遇だね、僕もだよ。まあ、壊理ちゃん幸せそうだし良いんじゃない?」

食事を終えて開店の準備をしていると、相澤先生が訪ねてきた。

「諸君おはよう。準備は出来ているようだな」

「「おはようございますー」」」

「お…おはようございます?」

緑谷達の挨拶を真似て、挨拶をする壊理にほっこりしつつ今日の予定について話し出す相澤。

「今日は予定通りヒーロー科A・B組の数名で来てもらい、実際の運営と同じように行ってもらおう。今回で出た問題点などは後々改善していくこと」

「分かりました。相澤先生はその間どうなされるんですか?」

「ん?ヒーロー科の余った奴らの指導をやってくる。ブラドの指導だけだとしても偏りが出てくるからな、存分にしばき…ん、んっ!指導してくるからな」

「今しばき倒すって言おうとしてませんでしたか?!」

「気のせいだ気のせい」

「いや、そんないい笑顔で言われましても!」

そうこうしているうちに、開店時間に。

軒先に暖簾を掛けて、お客さんを出迎える準備をしているとガヤガヤと遠くから声が聞こえてきた。

「どうやらヒーロー科の面々が来たようだ。」

「すでにすすくすすく達幻獣庵のメンバーは身だしなみを整えて、準備は万端だ。」

「いらつしやいませ、喫茶幻獣庵へようこそ！」

「おう、デク来たぞ」

「うわあ、オシヤレなところやねー！」

「雄英の資金力凄まじいなあ」

「おお、モフモフだらけだ」

A組から来たのは爆豪・麗日・耳郎・尾白。

「何名様ですか？」

「4人だ」

「テーブル席とお座敷がありますが、どちらがよろしいですか？」

「お座敷の方がすすくすすくと戯れるかな？」

「座布団に座る方式だし、そっちがいいかもね」

「じゃあ座敷で」

「かしこまりました、こちらへどうぞ」

緑谷の先導で座敷へ向かい、靴を脱いで座る。

「みんな、お客さんだよ」

緑谷が店内に呼びかけると、あちこちからすすすすく達が座敷に上ってきた。

「ああ〜可愛い〜!」

「…はあ、癒される〜」

女子陣（麗日・耳郎）は寄ってきたすすすすくに軽く埋もれながら、ひたすらモフモフしていた。

「ご注文が決まりましたら、お呼びください」

「ああ、分かった。しかし、相変わらずモフモフだなあお前ら」

「何かこの子にやけに懐かれてるんだけど、何で？可愛いからいいけど」

爆豪や尾白も思う存分にモフモフしている。

やけに尾白に懐いているのは、すすすすく美鈴。胡座をかいている上にちよこんと乗っかり、撫でている手を時々甘噛みしながら寛いでいる。

つい先日幻獣庵の軒先で寛いでいた所を発見し、保護をした。

どうやらすすすすく咲夜とは知り合いのようで、すすすすく美鈴が軒先で居眠りしている
とよく叱っている。

「注文俺は決まったが、お前らは？」

「決まったよ」「同じく〜」「ウチも」

「デク〜、注文いいか？」

「はい、ご注文をどうぞ」

メニュー表（すすくすく達のイラスト付き）を見ながら、注文をしていく。

「俺は春野菜のサンドイッチピリ辛風味をひとつ」

「唐揚げとフライドポテトの盛り合わせをひとつ」

「私はイチゴのすすくすくパフェをひとつ」

「ウチはマンゴーのふわふわパンケーキをひとつ」

それぞれが注文したのは上から爆豪・尾白・麗日・耳郎だ。

「はい、かしこまりました。少々お待ち下さい」

厨房に入り注文を伝えて、調理。

慣れない手つきながら作成していき、盛り付けは壊理にも手伝ってもらった。

10分ほど経ち、完成した料理から順に運ぶために壊理に頼んだ。

流石に全部は無理なので耳郎のパンケーキをお盆に載せて運んでもらい、残りはすすく

すくに運んで貰おうとしていると…？

「いずくどのー！」

「ん？どうしたの？」

「やってみたいことがあるのです！」

内容を聞いてみると、危険ではなさそうだったのでやってみようことに。

「お待たせしました。こちらご注文の品になります」

「えと、お待たせしました……?」

「わあ、この子が壊理ちゃん?可愛いねえ!」

「ああ、ありがとね壊理ちゃん。凄い美味しそうじゃん」

緑谷・トガ・壊理が料理を持ってきて、耳郎が受け取る。

見ただけでも分かるふわふわとしたパンケーキに、ホイップクリームが載っておりマ
ンゴーのソースが掛かっている。

クリームの横に果肉が載っており可愛らしい見た目になっている。

壊理が盛り付けを手伝った事もあり多少崩れているが、耳郎にその旨を話すと「ありが
とね壊理ちゃん、とっても美味しそうじゃん!」と笑顔で頭を撫でて、壊理はは
かみながら「えへへ……」と照れていた。

「俺らのはまだなのか?」

「今から来るよ、妖精さん達が試してみたい事があるらしくてね」

するとバラバラとエンジンの音が聞こえてきた。

音がする方を向いてみると、ゲームで見る様な戦闘機が2機飛んでいて妖精さんが
のつっていた。

戦闘機には紐が付いていて、先にはお盆が接続されておりそこに料理が乗っていた。

戦闘機とは思えない動きをしているが、妖精さんの不思議術と納得しよう。

「おお、カツコいいね！昔の戦闘機？」

「にしきおおがたひこうてい、つうしようはにしき^二だい^式てい^大です！」

「むかしはぶつしとかをはこんでました！」

「…飛行機つてホバリングできたか？」

「かつちゃん、妖精さんの技術は凄いから突っ込んじやいけないんだ」

「わあつとるわ、何と無く言っただけだわ」

料理が全部出揃ったので、いただきますと挨拶をして食べ始める面々。

味は好評のようで、口々に感想を言いながら次々に料理を口に運んでいた。

それを見ている緑谷達はニコニコと笑顔で見守っており、妖精さんや壊理ちゃんとハ

イタツチをして喜んだ。

その後は、耳郎とプリズムリバーすくすく三姉妹とのコラボでセッションをして盛り

上がった。

「ごちそうさん、美味かったわ」

「また来させてもらうね」

「はあー美味しかった〜！また来るね！」

「久しぶりに良いセッション出来たよ、またやろうね」

ヒーローの休憩所や日々の疲れを癒してもらうものとして試験開店が始まった幻庵。

閉店後、反省会を開く事になった緑谷達はリビングでお茶しつつ話し合っていた。

「結構忙しかったね。それに個人的な意見だけど、女性の店員があと数人いた方が良いのかな。男性の店員の割合が多いと嫌な人もいるかも知れないし」

「そうだな。後、出来れば現役ヒーローか元ヒーローに警備して欲しいんだよな。今は雄英の敷地内で営業しているからセキュリティは万全だけど、後々外でやるなら警備員みたいな人は必須じゃないか？」

「そうだね、僕も賛成。すすすすくちゃん達もこれから増えていくと思うし、人出は幾らあっても良いと思うよ？」

「でも都合の良い人居ますか？ある程度は妥協しないといけないと思うけど……」

女性の店員が何人か欲しいとなったが、解決策が浮かばずに早数日。一応先生には伝えて『こちらでも検討しておく』との返答が来た。

その間もヒーロー科や経営科の人間を相手に営業を続けて、ある程度は接客等に慣れていった。

休日の昼下がリトガは公園に1人運動がてら散歩しに来ていた。

そこは緑も多く、リラックスするには丁度いい場所での日も人影が疎らに見えてい

た。

（んうゝつはあく。こんなのにのんびり出来るのは久々な気がしますねえ。幻柔庵の経営も、何とか慣れてきましたし後は人出が欲しいですけど…ん？）

考え事をしながら歩いていると、とあるベンチが目に入った。

二色の長い髪を垂らした女性と、異形型の背が大きな女性で共通点などは見られなかったが同じ格好をして座っていた。

どちらも缶コーヒーを片手に持ち項垂れていた。何故かは分からないが気になって声を掛けてみることに。

「あの、大丈夫ですか？」

「ん？」「はい？」

トガに声を掛けられ顔を上げたベンチに座っていた2人。

「ええ、大丈夫よ。ちよつと疲れてただけ」

「私も。まだ私達異形型に対する偏見が強い地域があつて、中々就職が決まらなくて…」
どよんという効果音が当てはまりそうな2人。

何か運命的な物を感じ取ったトガは、先に断つて緑谷に連絡することに。

ちよんど近くをすくすく達全員と散歩していた緑谷は、それは快諾し向かう事に。

食材の仕込みを終えた後、幻柔庵もふもふ組と壊理で散歩しようとした所にトガか

らの連絡が来たのだ。

緑谷の格好は幻柔庵のエプロンを身につけて、お腹のポケットにすくすくプリズムリバー三姉妹が入っている。

幻柔庵を心操と口田に任せて、保育園などで使われる大きなカートのすくすく達と朱音を入れる。

妖精さんは肩や頭の上に乗っかっており、見た目は完全に保育士（ファンシー）だ。

「あ、トガさん！皆で来たけどどうし…ってレディナガン!?何で?!」

「え？お姉さんヒーローだったんですか?」

「ええ、まあね。少し前にやめて小さい雑貨屋を営んでるのよ。で、何でその子呼んだの?」

「今一番お姉さん達を癒せると思ってる」

ツンケンしていたレディナガン（以下ナガン）も、チラチラとこちらを見ておりすくすく達が気になるようだ。

まあ、カートに13匹ものモフモフがいれば嫌でも気になると思うが…。

「可愛い。この子達は君の個性?」

「ええ、すくすく達です。この子は朱音で、頭と肩にいるのが妖精さんです。良かったら撫でてあげて下さい」

ひよいとすすくすすく咲夜を抱え上げ女性に近づけて、抱き上げてもらうように伝える。恐る恐る抱えて撫でていくと、今までの霧囲気が霧散してほわほわとした空気を纏う様になった。

「凄く可愛い〜！ああ〜、癒される〜」

「きゅ〜！」

「レディナガンも良かったらどうですか？」

「いや、私は…」

ふとナガンが足元を見ると、すすく達がじーと見ており「撫でて撫でて！」という霧囲気を醸し出している。

撫でたそうにしながらも、元ヒーローのプライドが邪魔をしているのか視線が左右に動いている。

それを不思議に思った壊理がすすく妖夢をうんしよと抱え上げて、ナガンの方に近づけた。

「おねえさん、なでてあげて？」

「え、っ、いや私は…」

「きゅ〜？」「ウルウル」

可愛いすすくと幼女壊理のダブル上目遣いに勝てる者等いない。

狙撃してきた自分がまさか狙撃されるとはと自嘲を内心に浮かべていたが、恐る恐る抱き上げてじいくと見つめ合う。

すくすくがきゅー？と声をあげてフンフンとナガンと鼻同士でキスをした瞬間、ズキユンドキユンと心を撃ち抜かれる音が響いた気がした。

「ああもう！可愛すぎるでしょ！」

「きゅー！」

ものすごい勢いでモフモフモフモフしだしたナガンに驚きつつも、ここでさらに駄目押しとして全すくすくと朱音を投入。

ベンチにモフモフが溢れかえった。

ちなみにトガも我慢しきれず一緒に戯れている。

目麗しい美女・美少女が可愛いモフモフ達と戯れる光景は見る者全てを魅了するだろう。

「いづくどの、れでいながんどのならじょうけんにあっているのでは？それにもうひとりのかたも」

「そうだね、声は掛けてみるし先生にも相談してみるよ。でも今は…」

「そうですね、こころのそこからわらったりするのはいちばんのくすりです。げんじゅうあん幻柔庵はやっぱりひつようですよ」

「おとなはみんなつかれているものです。いやされるのはどんなじだいでもひつようです。これからすすくすくたちもふえるでしょうしたいへんになるでしょうけどがんばりましょう」

心の底から笑っている3人を見つつ、これからの事を考える4人。

取り敢えず全員が落ち着いたら話をしてみよう^{原作ではあり得ない}と決めて、今は目の前の幸せな光景を目に焼き付けておこうと何故か思った緑谷だった。